

# 縄紋時代中期集落における一時的集落景観の復元

## Research Notes

小林謙一

### 1 立論

日本列島先史時代縄紋文化の研究においては、土器による編年研究と、広域調査の成果を用いた集落研究の2つの分野が、大きなウェイトを占めてきた。過去において、両分野の研究が、交わることはさほど多くなかった。大雑把に言えば、編年研究は、縄紋研究の組織化を目的に、技術的な議論を繰り返し編年の細分化を目指してきたのに対し、集落研究は、縄紋社会の組織の復元を目的に、理論的な議論を優先させてきた。

両分野の研究成果が交差する数少ない場として、集落遺跡の時間的復元という作業があった。集落遺跡は、数百年のオーダーで縄紋人に利用され続けた場合が多く、結果的に100軒以上の住居跡を残すことが少なくないが、それら総てが同時に機能して大居住地を構成していたわけではない。同時存在の住居は何軒か、at timeの集落規模はどの程度であるかを、考古学的な調査成果の上から検証していくことは、精緻に細分された土器編年研究を集落の住居群に当てはめることによって、再構成可能であると期待された。しかし、万人が納得するような、縄紋集落の実態は明示できず、かえって研究者ごとにイメージする縄紋集落の姿が、大きく異なってしまう結果になった。同一の土器型式期でも、必ずしも同時存在ではないと考える研究者は、さらに細かな時間的尺度を要求したし、集落は細かな土器型式時期によって割り切れるものではなく一時に存在した住居の数は、調査された遺構以上にも存在するなど、実態はより多いはずであるとする研究者もまた、異なるロジックを求めたのである。

同時存在住居の把握とは切り離しても、集落遺跡内の時間的整理は、せいぜい地域ごとの編年単位である土器型式期に比定するに過ぎず、十分なものではなかった。こうした土器細別研究に対応した集落の時間的整理さえ、集落の構造分析を急ぐ立場からは、これ以上の土器による時期細別は、集落を解体しすぎる結果を招くとの危惧〔末木 1990〕も招いた。安孫子昭二氏も、多摩ニュータウン No. 446遺跡の分析において、土器型式の細分に従って集落の時期区分を行っていくことに疑問を表明している〔安孫子 1997〕。安孫子氏は、土器編年の細分化の現状を評価しつつも、住居の建て直し等を含む居住期間を出土土器が必ずしも反映しないこと、覆土中出土土器の一括性に様々な状況があり、必ずしも土器によって住居の時期を決定できるとは限らないことを指摘している。これらの問題点は、筆者も旧稿で指摘してきた内容を含む〔小林 1983〕が、土器細別時期で区分される住居数よりも、実際の同時存在住居（または居住構成員数）は多くなるという安孫子氏の論拠には、具体的な考古学的証左の蓄積が不足していると言わざるを得ない。集落の細分の結果、母集落

・拠点集落と評価される大規模集落の1時期の住居軒数が、数軒になってしまうことが問題であるとされるが、それは1集落の規模が小さすぎるとは、環状集落としての形をなさないとか、集団の人口が維持できないというような、前提的条件からの（集落の細分への）否定が先に立っているのが実状ではないだろうか。

一方、集落の細分屋の立場、即ち、林謙作氏が縄紋集落論の研究史の整理〔林 1994～1996〕の中で命名したところの「見直し論」の研究者、土井義夫が主張してきた「横切りの集落研究」〔土井 1991〕に連なる立場の研究者は、既存の土器型式の時間幅では、まだ長すぎると考える。定型的集落論への見直しを重視するあまりか、住居跡一軒がすべて短期的な期間の居住でしかないというような前提条件のもとに、各住居を排他的に並べるとき集落の細分を行い、各期1時期1軒とするような分析例も現れた。鈴木素行氏の木戸作貝塚集落の分析〔鈴木 1996〕は、住居自体の細かな分析と貝塚の堆積層序とを結び付け、精緻な分析を行っているのであるが、各住居の最終段階の時間的位置付けが相対的序列をなすことと、「住居は常に単独で1軒のみであった」との結論との間には、飛躍がある様に思える。言うなれば、「定型集落論」と「見直し論」といわれる2つの立場ともに、実態としての縄紋集落の復元が十分ではないように思えるのである。

極端な例で比較すれば、三内丸山遺跡の500年の存続期間で総計500軒の住居跡から、1時期100軒という破天荒な推論を行うような言及と、ほとんどの集落は時間的に重複した結果の姿であって細分すれば同時に存在する住居は1軒程度である、とする言及とにみられるように、縄紋集落の実態について対極にある2つのイメージが提示され、それぞれを出発点にした縄紋集落観・社会観が形成されつつある。

近年の集落論の多くは、ある意味では、これまで提示されてきた和島・近藤・水野各集落論の焼き直しの側面を持っていると言える。<sup>(1)</sup> 集落例の個別分析は結果的に理論構築の題材に過ぎず、現場にフィードバックした上での、集落の実態解明は、ある意味では必ずしも求められていなかったのではないかと。それは、同時存在住居の把握の必要性が、絶えず問題点の一つとして上げられながら、これまで棚上げにされてきた所に、端的に表れているのではないだろうか。集落の実態を明らかにするためのデータ採集や、仮設したモデルの検証を、調査現場に戻して検討するより、机上において既存の材料による縄紋社会の復元を希求したのではないだろうか。

ここで述べたような極端な考え方によらずとも、現在の集落研究においては、時間的整理をどうするか、どの住居とどの住居とが同時に機能しているのか、という時間的枠組みの問題は、絶えず鬼門となっている。

土器型式による細分時期によって集落遺跡から検出される各住居を時間的に位置づけていくことは、縄紋時代中期後葉加曾利E2式期というように、おおまかな時期区分に比定するという意味において、（出土土器があれば）可能であり、実際にオーソドックスな方法として試みられている。しかし、以下のような問題点から、極めて短期間の同時期の住居・同時存在の住居を復元することは、実際にはきわめて難しい。

**1 土器型式の問題** 現状における既存の土器型式時期は、絶対年代では100年以上の時間幅があり、同時存在で論ずる時間幅にはとうてい及ばない。土器型式をさらに細分化することは、現在においても努力されているが、細分されればされるほど研究者間での意見の相違・または細かな地域

差・遺跡差が顕わになり、共有の時間的尺度にならない結果になりがちである。また、完形土器でしか序列の定まらない土器型式編年では、実際に遺跡から出土する土器片・半存個体の土器の位置づけができない。

**2 出土状況の問題** 住居出土の土器が、そのまま住居の時期を表すとは限らない。住居覆土（多くの場合覆土上層である）の土器群は、住居廃絶後の廃棄または散らかし、周辺からの流入の遺物群であり、住居の構築時期とは限らない。住居埋設土器を用いて住居の構築時期を検討する方法（いわゆる下総方式 [塚田 1969]）は有効であるが、埋設土器がある遺構でしか、時期比定ができない難点がある。また、特殊な事例ではあろうが、周辺に廃棄されていた土器を拾ってきて埋設したと思われる事例 [小林 1993b・1997] もあり、検討が必要である。

**3 遺構自体の寿命・使われ方の問題** 土器型式の時間幅と、住居構築材の耐久年数とは、どちらが長いだろうか。また、住居は存在している期間、不変的に一定の居住者が使用しているのだろうか。空き家となる期間は含まれないのであろうか。住居の修復・改修・改築のスパンはどの程度だろうか。特定の製品の未製品を含む集中や、特定の土器タイプが集中して出土する住居など、特殊な出土状況をもつ住居は、居住者の性格や工房跡などの性格を反映したものなのか。住居間の関係はどうか。隣接した住居は同時存在できないのだろうか。さらに住居以外の施設・場との関係も問題になる。調理場としての集石遺構や貯蔵穴などの施設、廃棄場などが、共同利用なのか、特定の住居居住者の占有が想定されるのか。こういった遺構・遺構群の性格付けによって、同時存在の住居把握も異なってくる。

**4 セツルメントシステムの問題** その集落を残した人々の社会的行動によって、集落内住居の居住者の構成が変わるし、彼らのセツルメントシステムが、一定の土地に定着するか、移動的か、季節的な移動や集合離散を行うのか、居住メンバーの構成は固定的なのか、他の集団との間の交換や移動が頻繁なのか、といった縄紋社会のシステムとも関連して、集落のモデルは大きく変化する。

これらのうち、1・2のような考古学的事実に関わる問題点については、土器編年の精緻化、出土状況のデータ化を重ねなくてはならない。3・4とした縄紋時代人の居住活動の復元については、まず実証的に集落の復元を行ないながら検討して行くべき課題であり、やはり考古学的事実を重ねていった後に、墓制・生業などの検討とリンクさせつつ、居住活動・セツルメントシステムの問題にフィードバックさせていくべきである。

以上の問題点から、土器編年を精緻化するのみでは集落の同時存在の住居を明らかにするために不十分であり、また結果としての集落廃絶後の状況を掘り上げるような調査例の蓄積のみでは、集落の時間的動態を明らかにするデータは揃えられないといえる。

同時存在の住居を把握するためには、様々な方法を模索する必要があるが、これまでも、同時存在の住居を把握する方法として、以下のような試みが行われてきた。しかしながら、それぞれに一長一短があり、完全に成功したと言い得る方法はまだ見いだせないのが現状である。

#### 1：土器型式細別時期毎に住居を振り分ける。

上述したように、土器編年の細別時期の年代幅、竪穴住居の耐用年数の問題など、型式の期間と住居の居住期間とが平行ではない、という問題がある。また、住居の改築・建て替えなどによる見かけ以上の存続期間を持つ場合などが無視されてる。こういった問題点は、加納氏も指摘し

ている [加納 1988]。ある程度の時間幅を持つと割り切った上で、土器型式・細別時期毎に遺構を配分するとしても、その遺構とどのような関係があるかを検討せずに、覆土中一括出土の土器をもって遺構の時期とする考えは論外である。それは、遺構廃絶後時間経過があった上での廃棄・流れ込みの例が存在するからである [小林 1983など]。埋設土器を用いて遺構の時期を決めるとしても、遺構の時期と土器の時期とは100%パラレルではなく、遺構と埋設土器との時間的關係が矛盾する事例は確実に存在する [小林 1997] ことに注意しなくてはならない。それらは例外的な事例と考えられるとしても、埋設土器を持つ遺構しか年代的に位置づけることができないということになる。

以上より、出土土器によって遺構の時期を決定していく方法は、オーソドックスな方法ではあるが、決定時期の時間幅や正確さに限界があるといえる。

#### 2：遺構の形態・入口方向・主軸方向などで同時性をみる。

形態については、同一形態のものが同時に建っていたという論拠はない。むしろ、時期的に異なった位置づけがされた上で、同一の系統性なり、類似した遺構としての性格・用途を反映する可能性が考えられる。入口方向・主軸方向 [例えば三鍋 1990] についても、場合によって有効性をもつ可能性もあるが、地形による制約・風向きによる規制など様々な要因が考えられ、必ずしも同一の入口方向の住居が同時存在とは言えない。少なくとも縄紋集落の事例では、明瞭に同時存在住居を示せた例はないようである。

#### 3：遺構の重複関係や位置関係から相対的序列を求める。

遺構自体の重複関係は、その相対序列として構築の順番または廃絶の順番を計る尺度として確かである。また、住居間の距離を検討する場合もある。この場合、あまりに近い住居同士は同時存在し得ないと評価されるのであるが、切り合っているならともかく、上屋構造の大きさや構造が判明しない限りは、どの程度近いと同時存在できないかを、決めることはできない。1m離れていれば、同時に存在することは可能であろう。ただし、入口方向との絡みがあろうし、個別に条件が異なるであろうため、一概に判断できない。

#### 4：遺構間接合による同時性や埋没順序を把握する。

黒尾和久氏が事例分析を行いつつ示した [黒尾 1988a] ように、遺物の遺構間接合は、時として住居跡間の埋没順序という時間的關係を知る手がかりとなる。離れた住居間での、覆土上層出土破片と床面出土土器との接合、埋設土器との接合関係から、直接切り合わない遺構間の先後関係を知ることができる。ただし、遺物接合関係の検討のためには、出土遺物の点取り調査 (ドット記録) が必要である。接合する出土遺物の出土層位や、どの地点にどの程度の破片が遺存していたのか、どの住居跡に主体的に包含されていたのか、破片の分布の広がりほどの程度か、など、空間的な検討が必要であり、さらに、覆土中遺物が、一括廃棄などによって包含されているものか、混入・攪乱によるものか、などの検討も必要である。そうした細かな検討に耐え得るデータ化は、いまだ一部の調査にとどまっているのが実状である。

他に絶対年代 (遺構出土炭化材などへの年輪年代法の応用等) の利用も考えられるが、現時点においては、縄紋集落に適応可能な細かなスパンの絶対年代は手にすることはできない。また、遺構覆土の堆積状況から遺構の順序や時期別のグループを設定する試み [安 1997a・b] も行われているが、すべての集落に適応できるものではない。土壌の堆積する時間がどの程度かは不明だが、短い

時間ではないであろうし、同一の覆土の遺構がすべて同時存在とは言い得ないであろう。

以上に概観したように、これまで試みられてきた同時存在住居の把握は、必ずしも成功しているとはいえない。本稿で改めて提示する、「ライフサイクル」の復元による遺構相互の時間的關係把握〔小林 1995〕を、集落の時間的動態の復元に利用する方法の有効性を主張したい。

「同時存在」という概念の曖昧さも問題にしなければならない。竪穴住居のこういった状態をもって同時に機能しているとするか。上屋構造が建っていても、空き家の状態または廃屋の状態の場合もあり得るとすれば、どのように考えればよいだろうか。居住以外の目的に機能していた場合は、現段階においては居住施設と具体的に区別する手段はなく、形態・規模が通常の居住施設と同様の場合、同時に機能していたという点で、同時存在を捉えておくしかないであろう。ただし、機能を停止している状態、例えば廃屋状態・放置住居については、調査時に明らかにし得る可能性があると考え。季節的居住や回帰的な移動を背景とした一時的非居住（例えば夏の間は空いているなどの可能性〔武藤 1995などで指摘される季節的居住〕）についても、現段階では検討することはできない。こうした可能性も含めて、施設の維持が計られている間は、居住されているに準じた機能段階にあると理解しておく。

では、仮に単純に居住目的で竪穴住居が運用されているとして、どのような状態の住居とどのような状態の住居が同時存在と考えるべきか？ 竪穴は掘られている設営中の住居と、上屋構造が解体された廃絶住居とは、同時に存在していると捉えるべきか？

上記の問題は、なにを明らかにするかという分析の目的に応じて検討対象の幅を柔軟に捉えていく必要を示唆している。本稿では一時的景観における居住施設の数をもっと明らかにしたいと考え、同時に居住されている住居を捉えることにする。そのためには、居住に必要な要素が機能しているかどうかを検討するのが妥当であろう。考古学的に（発掘時の状況証左として）炉・床面・柱穴・その他の付属施設が完全に機能している段階の遺構の組み合わせを求め、または状況的に同時に機能しえない遺構の組み合わせを除外する作業ということになる。よって以下では、「同時機能住居」と呼ぶことにする。

以上の問題点については、竪穴住居のライフサイクル（図1）を想定すると理解しやすい。以下、本稿では構築終了の段階から、廃絶直前の段階にあると思われる、竪穴住居のライフサイクルの分節2構築以後、5廃絶直前までの分節にある遺構、即ち分節2構築（実際的には炉・埋甕・床面などが構築された直後）から分節3生活・分節4補修・改修段階の竪穴住居同士の同時機能の是非を問題としたい。

以下に、「遺構のライフサイクル」「同時機能遺構」「集落の一時的景観」「集落復元の時間的単位」「集落の規模」など、議論の前提となる部分を簡単に整理した上で、2・3の事例研究を行い、まずは比較的小規模・単純な集落例の時間的動態の復元から、縄文集落の実態に迫るための考えを論じてみたい。

## 2 前提条件の整備－概念規定と本稿での初期条件－

### a) 竪穴住居・住居跡のライフサイクル（図1）

住居として用いられた地点は、竪穴住居の計画・構築・使用・修復・廃絶・跡地利用・埋没など、

様々な形で利用され、時に改修・改築や新たな新築という形でフィードバックしながら、フローチャートをなす。こうした流れを整理し、調査の結果である考古学的痕跡から復元していくことは、相対的な時間の再構成につながる。それには、シファールによる物質のライフサイクルのモデル [M. B. Schiffer 1972] を、遺構または特定の場所・地点の使われ方の理解に利用することが有効である。ここでは、シファールのいう systemic context の部分を主に問題とし、廃棄後の遺跡形成過程については踏み込まない。具体的な作業においては、シファールのいう遺跡形成過程でのC変換、特に当時の居住者による人為的な構築・使用・廃棄と再利用・転用・維持の行為によるサイクルに関する部分を検討する。埋没後の自然的要因による移動などについては、問題が大きくなりすぎるため、今回は検討から外すものである。シファールのライフサイクルモデルについては、旧稿 [小林 1996a] において紹介しているので参照されたい。

「縄文住居の一生」という観点からのライフヒストリーとしての観察・記述は、小林達雄 [小林 1965]、山本暉久 [山本 1978]、小杉康 [小杉 1985・1990] 各氏により試みられている。こうしたフローチャートは、住居以外の遺構・活動痕跡にも当てはめることができ、各遺構間の関係を探る上でも重要な示唆を与えてくれる。システムチックなモデルとしての検討により、さらに集落構造の分節解明へと止揚することが可能であり、集落というセトルメント自体のライフサイクルの解明へと進むこともできよう。以上、ライフサイクルのモデルについては、旧稿 [小林 1994 b・1995・1996 ab] を参照されたい。

### b) 同時存在・同時機能

居住施設という機能に縛られず、竪穴住居跡と化した窪地としての状態をも含めた、空間的な地点としてのセトルメントのライフサイクルという点から見るならば、居住施設としての廃棄後の、「廃屋儀礼」や「もの送り」などの行為の可能性を含む「複合的廃棄活動の場」や「廃屋葬」といった埋葬の場、石器製作の場またはそれに伴う不要な碎片的廃棄場としての住居跡地、窪地化後の「廃棄場」「集積場」としての空間、凹地を利用した集石遺構の構築など、多様な利用のされ方をしているのであり、そういった機能を含めれば「同時存在」の幅は大幅に広がる。建石徹氏の分析によれば、南関東の縄文集落でも、住居跡埋没後も「微窪地」[建石 1995] として、数百年以上のオーダーで窪地が残っている状況が推測できる。こういった微窪地が、活動エリアとして積極的に評価されていたかどうかは別としても、集落の景観復元を考える場合、当時の生活者に認識できたであろう微窪地の存在を無視することはできない。そのように考えると、「利用する活動場所」という意味では、居住施設として機能している住居と、居住施設以外に転化した住居跡地、さらに利用の場として避けられている微窪地の組み合わせでみるべきである「一時的景観」の復元が、本来的

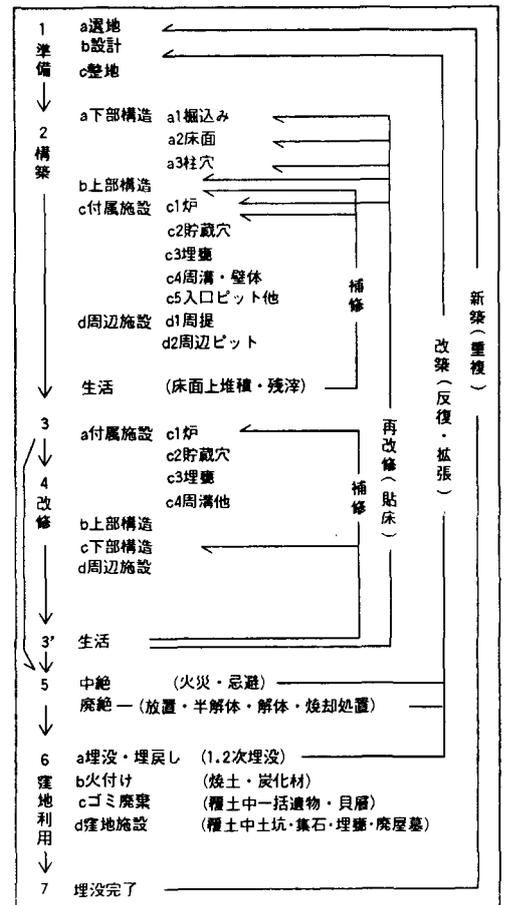


図1 縄文時代住居・住居跡のライフサイクル

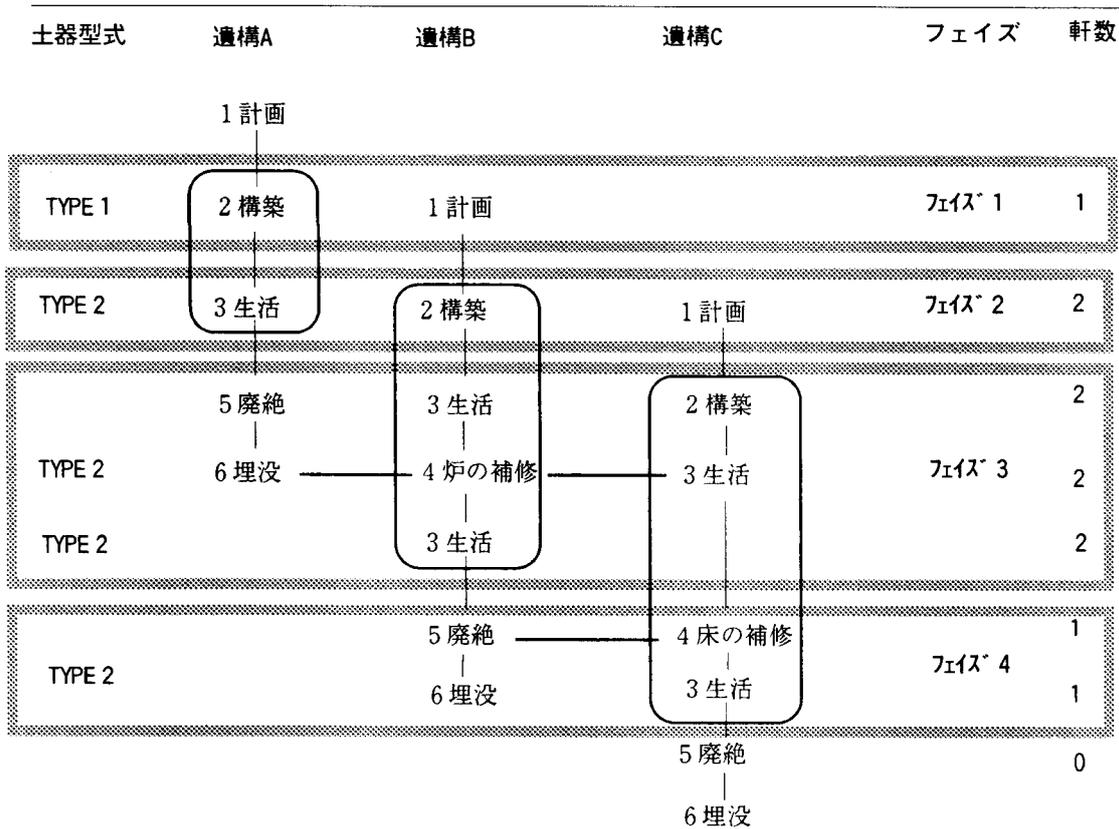


図2 遺構のライフサイクルからみた居住のフェイズ

には必要である。しかし、本稿では一時点での居住施設数（居住単位数）の把握を目的とするため、住居構築から使用までの状態にある住居を対象とすることにする。

また、遺跡によっては集石遺構などにおいても、礫の接合状況・構成礫の被熱・破碎の度合いの比較等から、礫の再利用をトレースし、使用の頻度や構築順序・使用サイクルが復元し得る場合があり、同時に機能した集石と住居の組み合わせも接合関係などから復元し得る場合がある。しかしながら、特に集石では土器の出土が乏しく、また礫の接合作業は土器のそれよりも困難なため、必ずしも総ての遺構について検討することはできない。本稿では、まず第一に居住施設としての住居について、同時機能の遺構群の検出を検討することとしたい。

**c) 住居のライフサイクルからみた居住の同時性・一時的景観の復元（図2）**

出土土器・遺構形態などから1土器型式時代に属する遺構群を抽出した上で、ライフサイクルのモデルを用い、住居Aの構築後廃絶前までの分節と住居Bの構築～埋没完了までの分節の間に、遺構の切り合い等による新旧関係や遺物の接合による相互の関係が捉えられれば、ある時点でともに機能していたかどうかを決めることができる。これを集落内の遺構相互に検討できれば、どの住居が同時に上屋構造が保持されていたかを把握することができ、一時的景観の積み重ねを得ることができるであろう。状況によっては、住居のみならず、集石・貯蔵穴・墓坑などの他の遺構との関係も明らかにし得る。

ライフサイクルの分節を比べるに際し、各分節毎の時間経過を概ね一定と仮定する。例えば、住

居 A と住居 B の耐用年数や、改築・改修のサイクルが極端に時間幅が異なることはないと考えておく。

また、住居群のみを検討するのではなく、集石・貯蔵穴・墓穴などの付帯施設、廃棄場・石器製作の場・儀礼的行為の痕跡など、接合関係によって関連づけられていく遺構や場を、複合的な遺構群として捉えていくことが可能であれば、さらに具体的な集落の一時的景観が把握できるはずである。連続的・断続的という要素については、別途検討方法を探らなくてはならないが、一時的景観の集積として復元できるであろう集落内の同時機能遺構群の組み合わせの時間的序列が整理されれば、それぞれを瞬間的 (at time) な時間的まとまりとして、(集落の)「フェイズ」と規定し、遡り得る最古の段階から、フェイズ1、フェイズ2と順に名前づけていくこととする。ただし、接合関係がないなど証左の不足から前後関係が明確でない場合や、同時機能住居自体に変化がない微妙な時間的単位などは、フェイズ1a・bなどと称しておくべきかも知れない。

各分節毎の同時機能を決めるのは、炉・埋甕や床直遺物などと包含遺物の接合関係を重視し、先後関係については、遺構自体の重複などの切り合い関係や接合遺物のレベル差をもって決定することとする。こうした遺構の同時・先後関係の集成を、集落内のフェイズとして整理する。埋設土器自体の土器型式時期や、遺構形態なども、各遺構の大枠としての時期決定に用いるほか、このフェイズの決定にも参照する材料としている。

#### d) 土器細別時期設定

本稿では、南関東縄紋中期の集落分析を目的とした、現時点におけるもっとも細かな細別時期設定である「縄文中期集落研究の新地平」での編年〔黒尾・小林・中山 1995〕を用いて、時期名を表す(以下「新地平編年」と呼称)。この編年案では、五領ケ台式、勝坂式、加首利E式を計13期31細別に時期区分した。各時期の時間幅は同一ではなく、時期によっては更なる細分も検討されるべきであるが、おおまかにいって縄紋時代中期が約1000年間として、31細別で割れば、1細別時期約30年強と考えられ、1世代の時間幅に近いと思われる。土器編年研究の細分の限界に近い成果と考えられるのである。一方、これだけの短い時間幅であっても、一時的景観が求めようとしている一瞬の時間には、ほど遠い時間幅である。

以下、本稿では、土器による時期設定(土器細別時期と呼ぶ)として、「新地平編年」を用い、集落・遺構の概ねの時間的位置を表すのに用いることとする。

#### e) 集落の規模・性格

一時的景観での住居数または居住する構成員数で、その居住地としての規模の大小を決めるか、結果として残されている「のべ遺構数」による遺跡としての大小を言うかの2つの基準が考えられる。当時の社会的状況を復元することを目的とする本稿では、可能な限り前者の状況を復元したいと考えるが、一時的景観に存在する遺構の把握が果たされない現時点においては、時間的に細分し得る限り型式細分した細別時期設定を用いて一定の時間幅に存在した住居数による擬似的な軒数と、残されている土器や石器などの数量といった状況的な証左をもって便宜的に集落の大小を規定しておきたい。もちろん、遺跡の範囲の問題、調査面積や調査精度による違い、周辺環境や地形による遺跡の遺存状況など、様々なバイアスが想定できるが、その点については置いておく。

ここで筆者が調査に関わったという点で、同一の基準により検討できる、南関東地方縄紋時代中

期の集落遺跡の規模の比較として、表1を示す。

湘南藤沢キャンパス内遺跡(SFC) I区では、勝坂3式古期(新地平9a期)の住居4軒と加曾利E3式期(11c1期)の住居1軒が存在する。両時期には明らかに断絶があるので、前者をSFC I区C1、後者をSFC I区C2と表記し、別々のセツルメントとして扱う。同様に、湘南藤沢キャンパス内遺跡(SFC) V区は、勝坂2式の住居1軒(7期)、加曾利E3式期の住居1軒(12期)が検出された地点であるが、部分的な調査のため全容は不明である。両者には時間的断絶があるため、前者をSFC V区C1、後者をSFC V区C2とする。三矢田遺跡も、加曾利E3式期の集落の中で、10期の5軒を三矢田C1、時期的に断絶がある11c期に属す1軒を三矢田C2として、別に集計する。

表1の住居時期は、(土器時期の上で)連続的に住居の営まれる時期幅を、新地平編年での土器細別時期で記す。調査状況の欄には、参考までに調査面積・その調査面積が同一の台地部内での推定される居住域を、どの程度カバーしていると思われるか・遺跡の攪乱の度合いを記した。検出量として、住居時期に属す住居遺構の総軒数(掘込みの数であり「堅穴」と記した。同一掘込みでの複数床面や炉の改修等は考慮されない数である)、土器の総破片数(報告者である筆者が、概ね同一の基準で時期判定可能な土器片数をカウントした数)を記す。土器量最大時期としたのは、新地平編年での細別時期毎に見た場合に、最も多くの土器片がカウントされる細別時期と、その時期に属す住居軒数である。一時的景観とした欄は、次節にて検討する住居ライフサイクルから推定したフェイズのうち、最も住居数が少ないフェイズの住居数と、最も多いフェイズでの住居数を記す。即ち、単独住居のキャンプ地は、検出堅穴数、土器細別時期住居数、一時的景観での最小住居数、最大住居数とも1軒となるが、複数時期にまたがり、堅穴数が複数ある定着的居住域では、それぞれ異なった住居数がカウントされる。ただし、目黒区大橋遺跡・早川天神森遺跡については、今回一時的景観を復元していないため、該当する欄に\*を記してある。

以上の数値より、以下のようにセツルメントの性格を評価する。

居住地の規模の評価として、土器細別時期に区分して住居1軒のみの単独住居、住居3・4軒程度の小規模集落、5軒以上の大規模集落に区分しておく。

居住の継続性については、土器細別時期が連続する時期幅をみて、1細別時期のみを単期と表記し、それ以上の場合を、何期と連続する細別時期幅で表記する。

セツルメントの性格として、複数期にわたる小規模・大規模居住地を「定着的居住域」(旧稿[小林1988]におけるMO型〈Multi Occupation〉集落及びSO型〈Single Occupation〉集落のうちのMO型集落当初段階を含む)、単独住居が短期的に営まれるセツルメントを「キャンプ地(生業活動拠点)」(旧稿[小林1988]におけるSO型集落のうちの単期的な集落を含む)と評価することにしておく。これをみると、小規模集落と大規模集落と評価した集落とでは、住居総数、土器数ともに、大きな差異が現れていることが明確である。これが、1時期での集落規模の差であるのか継続期間によるものであるのかに関わらず、少なくとも南西関東の中期中葉(勝坂式最盛期)～後葉前半(加曾利E3式前半期)のセツルメントでは、居住地遺跡は大きく2分できる可能性(単独住居のキャンプ地を含めると3分)を示唆している。

表1 縄紋中期集落の規模の比較

遺跡名	住居時期	調査状況 調査面積	推定調査範囲	攪乱の度合い	検出量 住居数	(型式) 土器量(片)	土器量最大時期 土器細別時期
真光寺三矢田C1	10a~10c	35300㎡	ほぼ全面	少ない	5	2322	10a
真光寺三矢田C2	11c	35300㎡	ほぼ全面	少ない	1	247	-
SFC I区C1	9a	15000㎡	ほぼ全面	少ない	4	3870	9a
SFC I区C2	11c1	15000㎡	ほぼ全面	少ない	1	84	-
SFC II区	9a~9c	11000㎡	9割程度	少ない	4	1613	9b
SFC III区	8b	1000㎡	5割程度	少ない	1	113	-
SFC V区C1	7	1000㎡	2割程度	少ない	1	36	-
SFC V区C2	12	1000㎡	2割程度	少ない	1	20	-
目黒区大橋1・2次	12a~13b	12422㎡	8割程度	多い	89	150192	12b
早川天神森	10a~13a	3850㎡	3割程度	少ない	27	22204	12a

#### f) 分析対象集落の概略

○神奈川県藤沢市慶応義塾湘南藤沢キャンパス内 (SFC) 遺跡 I 区, II 区, III 区, V 区

多摩丘陵南端の高座丘陵に位置する。I 区は、SFC 遺跡中央の溺れ谷を望む標高35m を計る舌状台地上の集落遺跡で勝坂3式古期(9a期)の住居4軒(SFC I区C1)と加曾利E3式期の住居1軒(SFC I区C2)とが存在する。前者は2期にわたる小規模集落、後者は単期の単独住居である。

II 区は、相模川支流の小出川を望む標高34m を計る舌状台地南部に存在する勝坂3式新期(9b期)の住居4軒が認められる、2期にわたる小規模集落である。

III 区は、溺れ谷を南に望む舌状台地南縁辺で勝坂3式期の住居1軒が検出された地点であるが、部分的な調査のため全容は不明である。単期の単独住居と評価しておく。

V 区は、小出川を東に望む台地東側縁辺で勝坂2式の住居1軒(SFC V区C1)、加曾利E3式期の住居1軒(SFC V区C2)が検出された地点である。ともに単期の単独住居と評価しておく。

以上の4地点6セトルメントは、小河川・溺れ谷に挟まれた南北880m、東西720mの範囲の丘陵群に展開する近接した小規模セトルメント群であり、時間的にも連続する。また、共伴する土器の検討の結果、細別時期ごとに各セトルメントの利用時期が異なっており、小規模な集団が連続的に居住し続けたか、近隣の大規模集落から各時期ごとに小集団が分派されていた可能性が考えられる。どちらにせよ、各セトルメントは、土器細別時期でも、基本的に同時に併存してはならず、V区C1→III区→I区C1→II区→I区C2→V区C2と連続的に地点を辿ることができる[小林1993a]。

○東京都町田市真光寺・広袴遺跡群三矢田遺跡

南多摩丘陵の中央、鶴見川支流の真光寺川と片平川に挟まれた標高97mの尾根上に存在する縄紋前期から中期の集落遺跡である。今回は、縄紋中期後葉加曾利E1~3式期の住居6軒について扱う。新地平編年10期にあたる5軒のC1集落と、11期にあたる1軒のC2集落とに区分した場合、前者は3期にわたる小規模集落、後者は単独住居と評価できるが、両者の間の時間的断続は比較的短く、居住地として意識的に再利用された可能性もあるため、以下の分析では両者をあわせて検討する。

先に整理した概念を用いて、表1に示した集落遺跡のうち、まずは分析が比較的容易な小規模な

(型式細別期) 1 細別期住居数	一時的景観		評価 規模	継続	性 格
	最小住居数	最大住居数			
3	1	2	小規模	3 期	定着居住域
1	1	1	単独	単期	キャンプ
4	1	3	小規模	2 期	定着居住域
1	1	1	単独	単期	キャンプ
4	1	2	小規模	2 期	定着居住域
1	1	1	単独	単期	キャンプ
1	1	1	単独	単期	キャンプ
1	1	1	単独	単期	キャンプ
19	*	*	大規模	4 期以上	定着居住域
6	*	*	大規模	4 期以上	定着居住域

定着居住域の事例を分析し、集落の時間的動態を細かく復元可能であることを示す。具体的には、住居総数が5・6軒以下・時期的に短期的な小規模集落として、湘南藤沢キャンパス内遺跡（以下「SFC 遺跡」と略記）Ⅰ区、Ⅱ区、三矢田遺跡の3集落（3単位のセツルメント）を取り上げる。

### 3 事例分析

今回は、3つの小規模集落、即ち、勝坂3式古期（9a期）のSFCⅠ区C1集落、勝坂3式新时期（9b期）のSFCⅡ区集落、加曽利E1式期（10a～c期及び11c期）の三矢田集落（C1・C2集落をあわせて検討する）の細かな時間的変化をトレースすることで一時的景観としての中期集落の姿を明らかにしたい。

#### 1) SFCⅠ区C1集落（図3～5）

台地南端部に4軒の住居が直線的に配置され、外側を20基以上の集石遺構が巡っている。これらの遺構は、出土土器からは、全て同一の勝坂3式古期（9a期）に位置づけられている。炉体土器がある2号住居は9a期の炉体、3号住居はやや新しい要素のある9b期に近い土器を炉体（炉側埋設）としている。1号住居・4号住居は埋設土器を持たないが、炉内・柱穴内などから9a期の土器片が出土しており、当該期の構築・使用の居住施設であると思われる。通常、同一時期の4軒の集落と理解される構成であろう。しかし、以下のように、遺構同士の接合関係を遺構のライフサイクルに合わせて位置づけていくと、4軒が同時に存在したことはありえないことが判明する。

まず、遺構間接合として1号住居・2号住居及び4号住居の各覆土上層出土さらに集石6及び8において出土した礫の接合がある。これは、集石遺構に用いられたこぶし大の焼礫の破碎であり、焼礫が繰り返し使用されていた結果と考えられる。また、2号住居覆土中に廃棄されていた半完形土器の2片が、1号住居覆土に包含されていた（図3-2住☆）。このことから、6号集石・8号集石を蒸し焼き料理などの目的で繰り返し使用していた際、1・2・4号住居はすでに埋没していたこと、これに対し3号住居は、周辺に広くこれらの接合礫が分布しているにもかかわらず3号住居覆土中には同一の礫がみられないことから、同一時には居住施設として機能していたことが推定される。また、3号住居炉体土器の欠けた口縁部破片が、7号集石中に焼けた土器片として包含されていた（図3-3住□）。即ち3号住居の炉埋設時（または炉の使用による破損時）に、不要口縁部破片が集石に混ざり込み、焼けたと考えられる。この7号集石は、6号集石と礫の接合が見られるこ

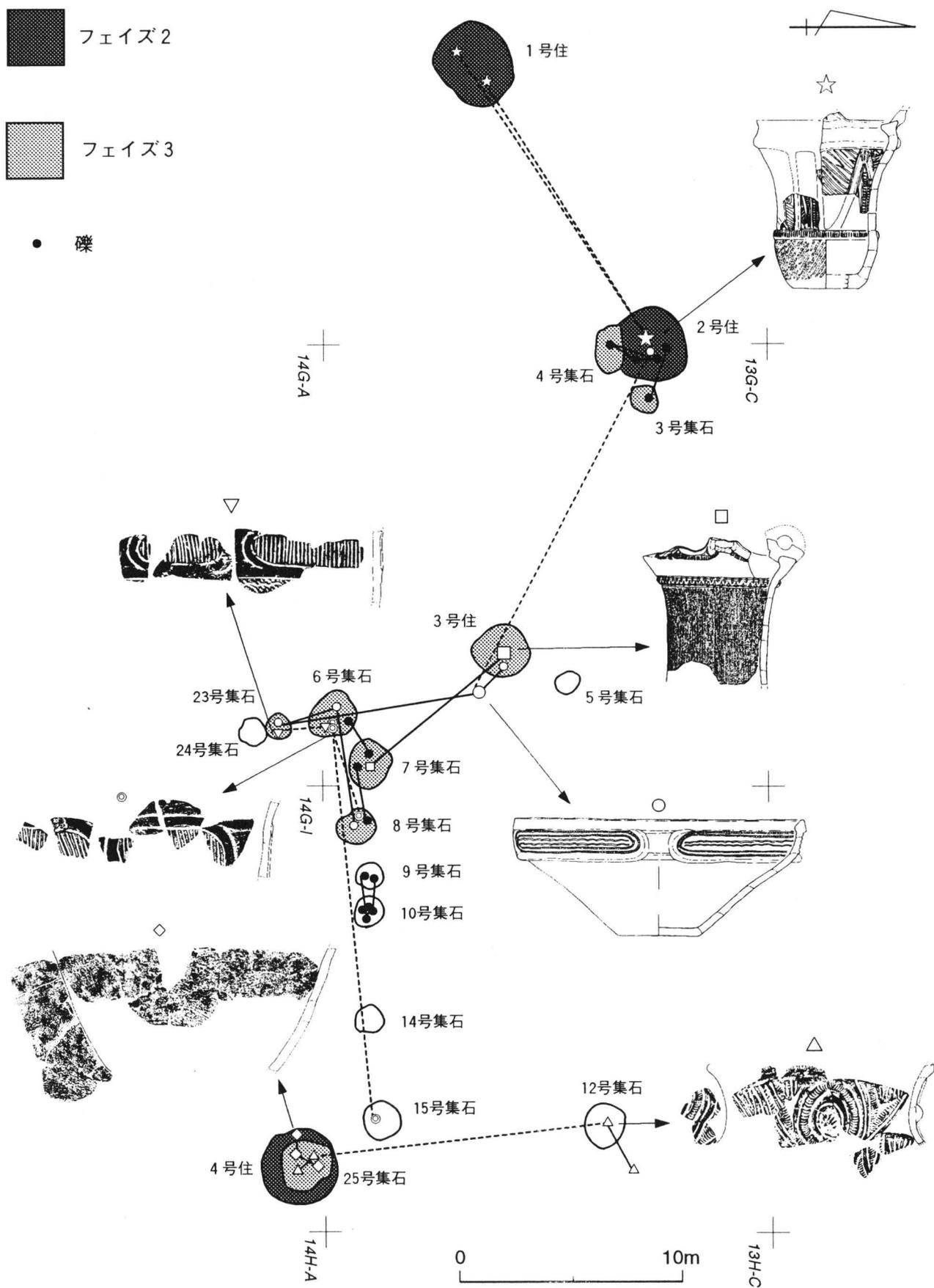


図3 SFC I区 フェイズ2・3土器接合関係図 (1/250)

SFC I 区

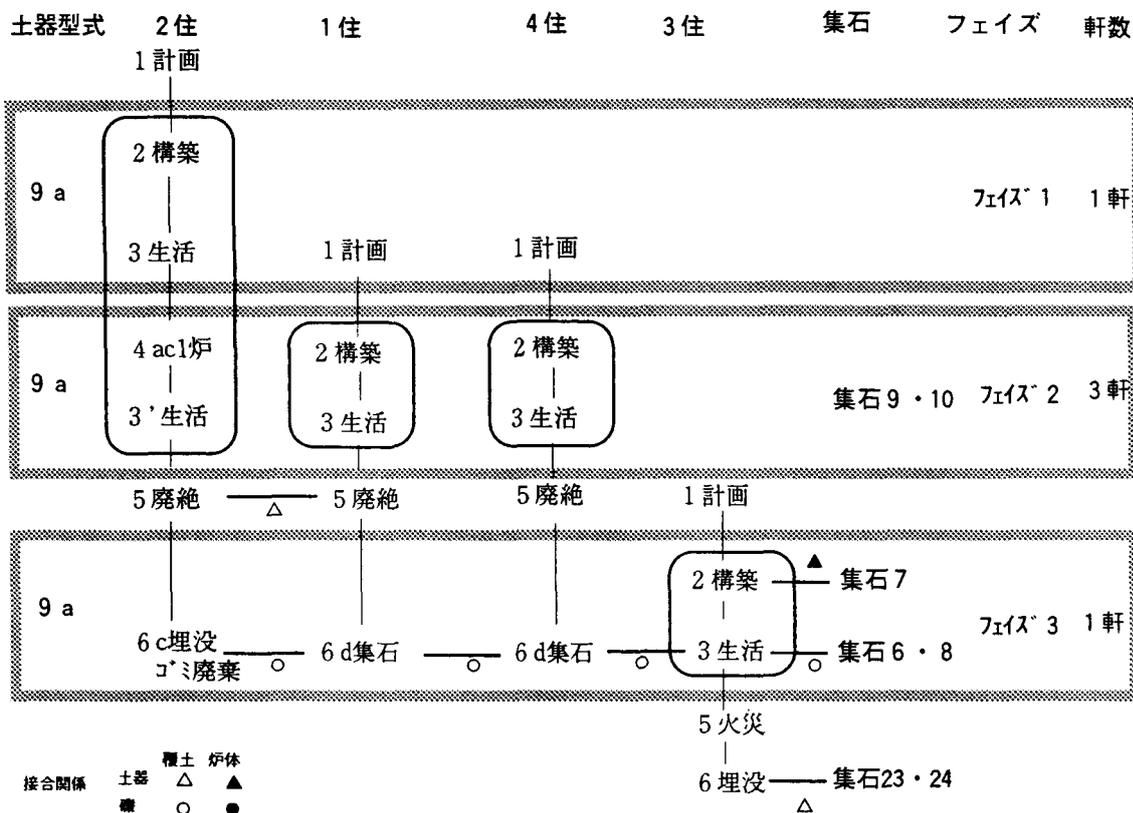


図4 SFC I 区 C1 集落のフェイズ

とから6・7・8号集石はほぼ同一時に使用されていた（構成礫が7号集石の方がより破碎されており、7号集石の方がやや古いとも考えられる）と言え、これらの集石群を使用していたのは3号住居の居住者であると考えるのが合理的である。

1号竪穴住居及び4号竪穴住居は、ともに改築・改修等のライフサイクルのフィードバックは見られず比較的シンプルな住まわれ方をされた後、覆土下層が埋没した段階で窪地を利用した集石遺構として利用されている。2号住居は炉や柱穴の作り替えなど、住居上屋構造及び内部施設の作り替えを行っており、住居のライフサイクルにおいて1回以上のフィードバックがおこなっていたことがわかる。よって、より古くから存在していた可能性がある。以上より、SFC I 区 C1 集落では、まずフェイズ1として2号住居が設営される。次にフェイズ2として1・4号住居が加わり、かつ2号住居も機能していることから3軒が居住されている段階がある。この段階において検出レベルが若干低いなど古い様相を持つ9号・10号集石群が使用されていたと考えられる。フェイズ3として、前段階の住居群が廃絶後、3号住居が構築され6～8号集石とともに機能していたと考えられる。最終的に3号住居は被熟住居<sup>(2)</sup>となっている。

さらに、3号住居覆土中出土礫と接合関係のある23・24号集石は、3号住居廃絶後に利用されていた集石であると捉えられ、居住活動はみられないため今回は設定してないがフェイズ4と捉えることも可能である。集落廃絶後も引き続き生業活動のためのキャンプサイトなどに利用されていた

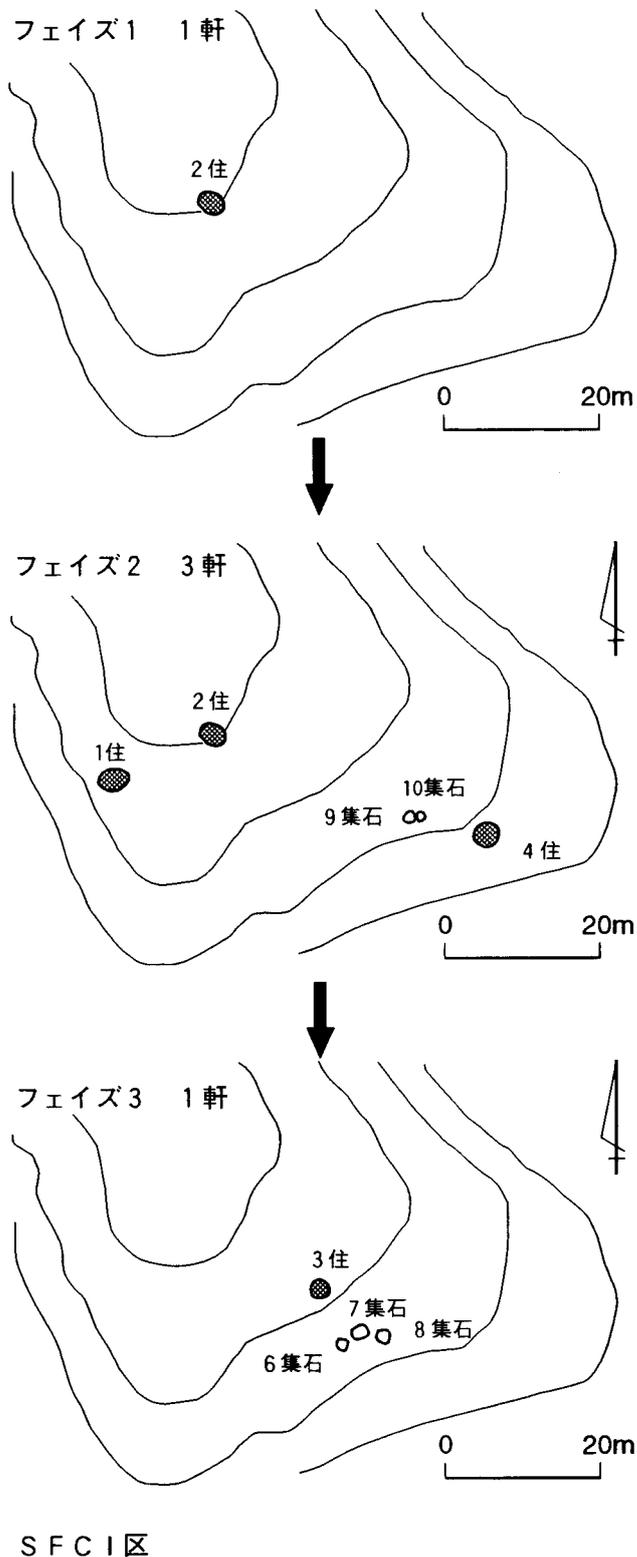


図5 SFC I区 C1集落の変遷

と考える。

## 2) SFC II区集落 (図6~8)

勝坂3式新期(9b期)の住居4軒と集石、屋外埋甕などが、台地南端に半弧状に配置されている。ただし3号住居は半分以上が調査区外にかかるため、詳細は不明である。

これら4軒の住居では、出土土器からみると1号住居が、北側谷向かいに位置するSFC I区集落と同一時期の勝坂3式古期(9a期)の土器を炉体土器としており最古に位置づけられる。2号住居は、その次の段階である勝坂3式新期(9b期)の炉体を持つ。4号住居は埋設土器を持たないが、床面出土土器には勝坂3式終末期(9c期)の土器があり、集落最新の住居と考えられる。これまでの土器型式を利用した集落復元では、勝坂3式期の4軒の集落と考えるものであるが、細かな土器編年を利用すると各時期1軒(3号住居は不明)の3時期に細分と捉えることもできる。即ち、土器による時期比定の方法によって、1時期4軒の集落という捉え方と、3細別時期に分かれ各1軒のみの住居による単独の居住地という捉え方の極端に異なる理解の仕方が可能となるのである。本集落例も、接合関係を各住居のライフサイクルの流れに当てはめると、細かな構築・使用・廃絶の順序がトレースでき、具体的に同時機能の住居・集石を捉えていくことによって、集落の実態に迫ることが可能である。

最初は、9a期の炉体土器を持つ1号住居1軒が構築されている(フェイズ1)。この1号住居床面と2号住居

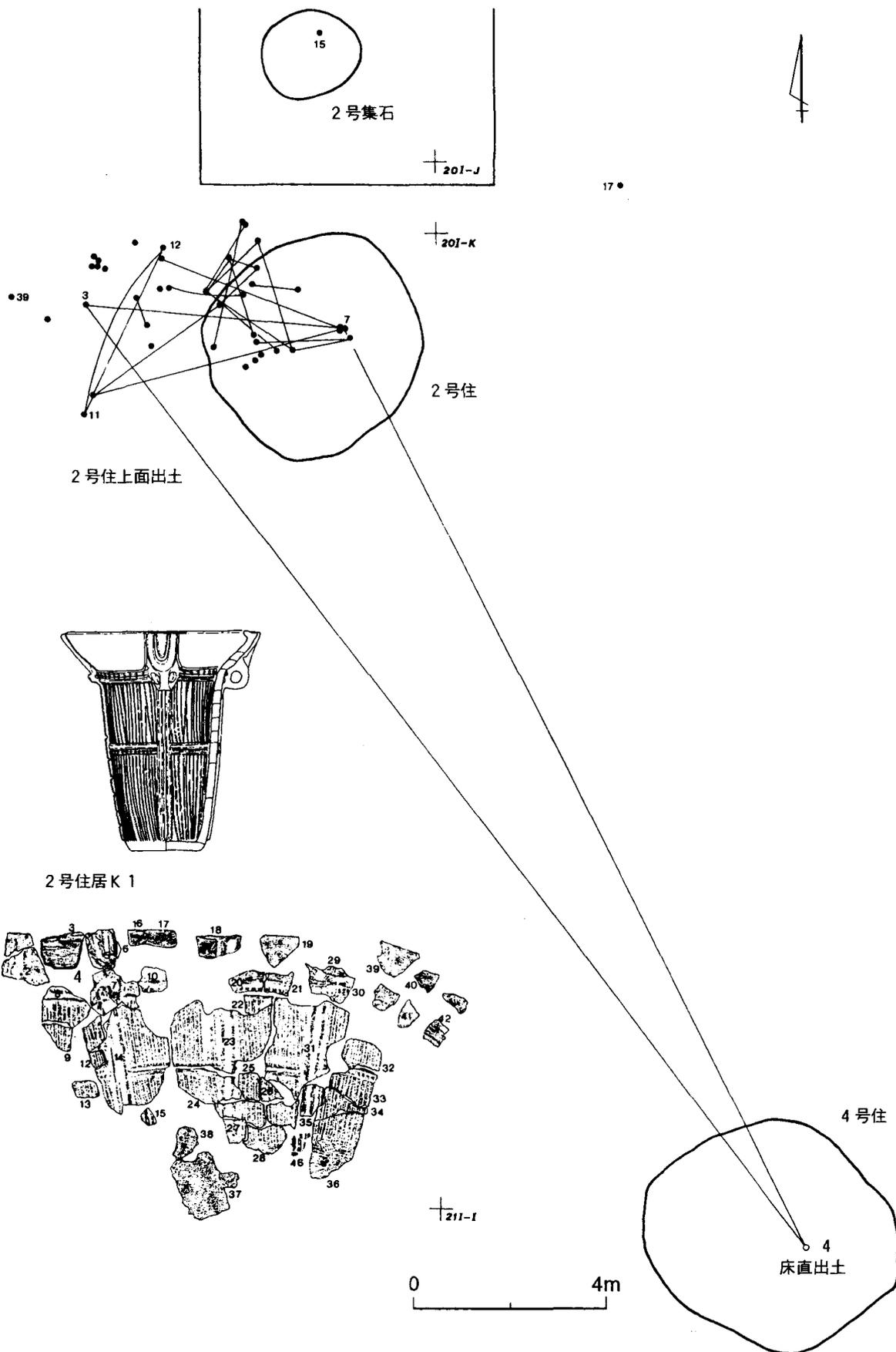


図6 SFCⅡ区 フェイズ5 土器接合関係図 (1/120)

床面出土の被熱破砕礫が接合し、さらに1号集石出土礫と接合する。1号住居床面は被熱で礫とともに焼け、2号住居には焼けた後持ちこまれている。このことから、1号住居・2号住居が、同一時に機能していたと捉えられる（フェイズ2）。2号住居上面には、完形に復元可能な土器が廃棄されているが、そのうちの1個体の口縁部小破片が4号住居床面より出土し接合する（図6）。また、4号住居床面出土礫と2号集石出土礫が接合することから、4号住居と2号集石が同一時に機能していたことがわかる。

以上より、2号住居埋没後に4号住居が機能していたと捉えられ、1・2・4号住居が同一時に機能していたフェイズ3と、2号住居・4号住居が同一時に機能していたフェイズ4、最後に4号住居のみが機能しているフェイズ5に区分することが可能である。なお、4号住居は覆土中に多量の土器が出土する、いわゆる「吹上パターン」の出土状況<sup>(3)</sup>を呈するが、この覆土中の土器群は、4号住居床面出土の土器群より1細別時期古く、層位的な出土順序とは逆転する。これは、4号住居覆土下層埋没後に周辺に遺存していた土器群が窪地に流れ込んだものと考えられる。即ち、4号住居廃絶後に、人為的に土器廃棄を行ったのではない（より新しい居住者は存在しなかった）と考えられる。ただし、前述のように3号住居の時間的位置づけが不明確なため、断定はできない。

### SFC II区

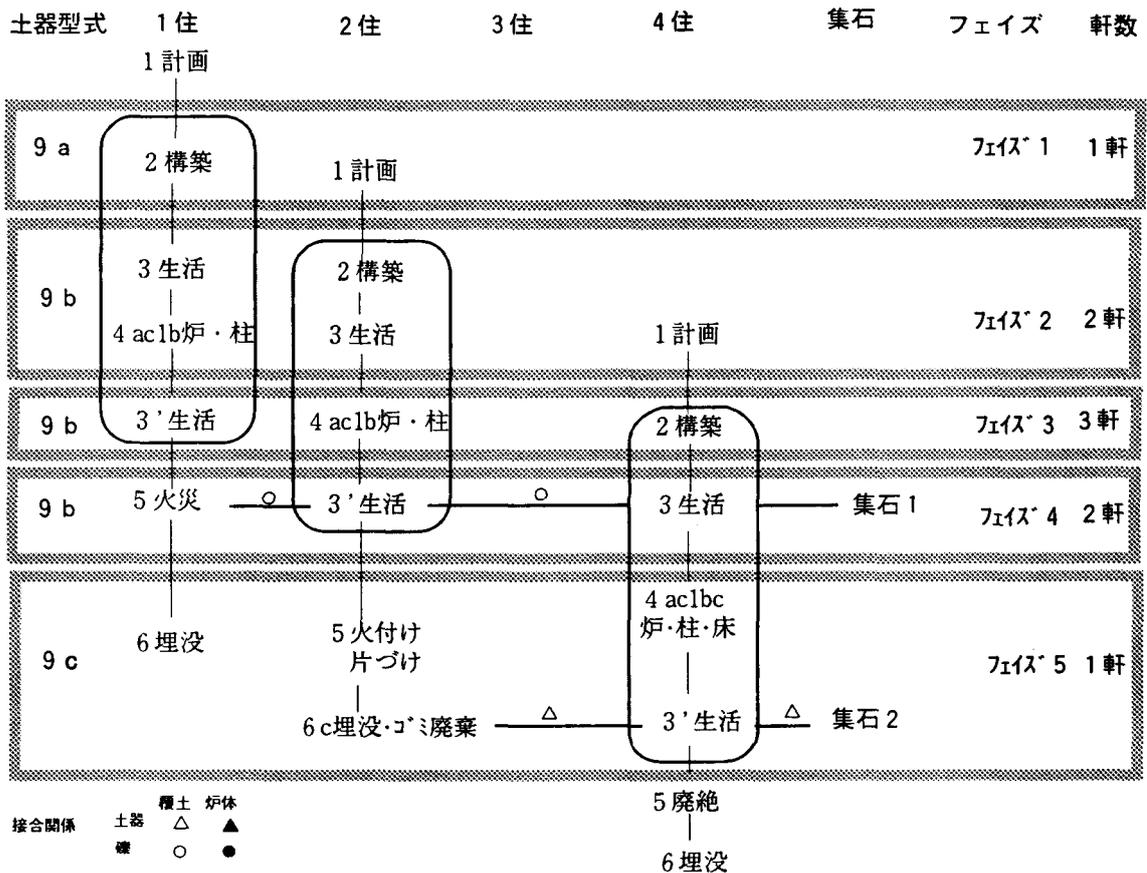


図7 SFC II区集落のフェイズ

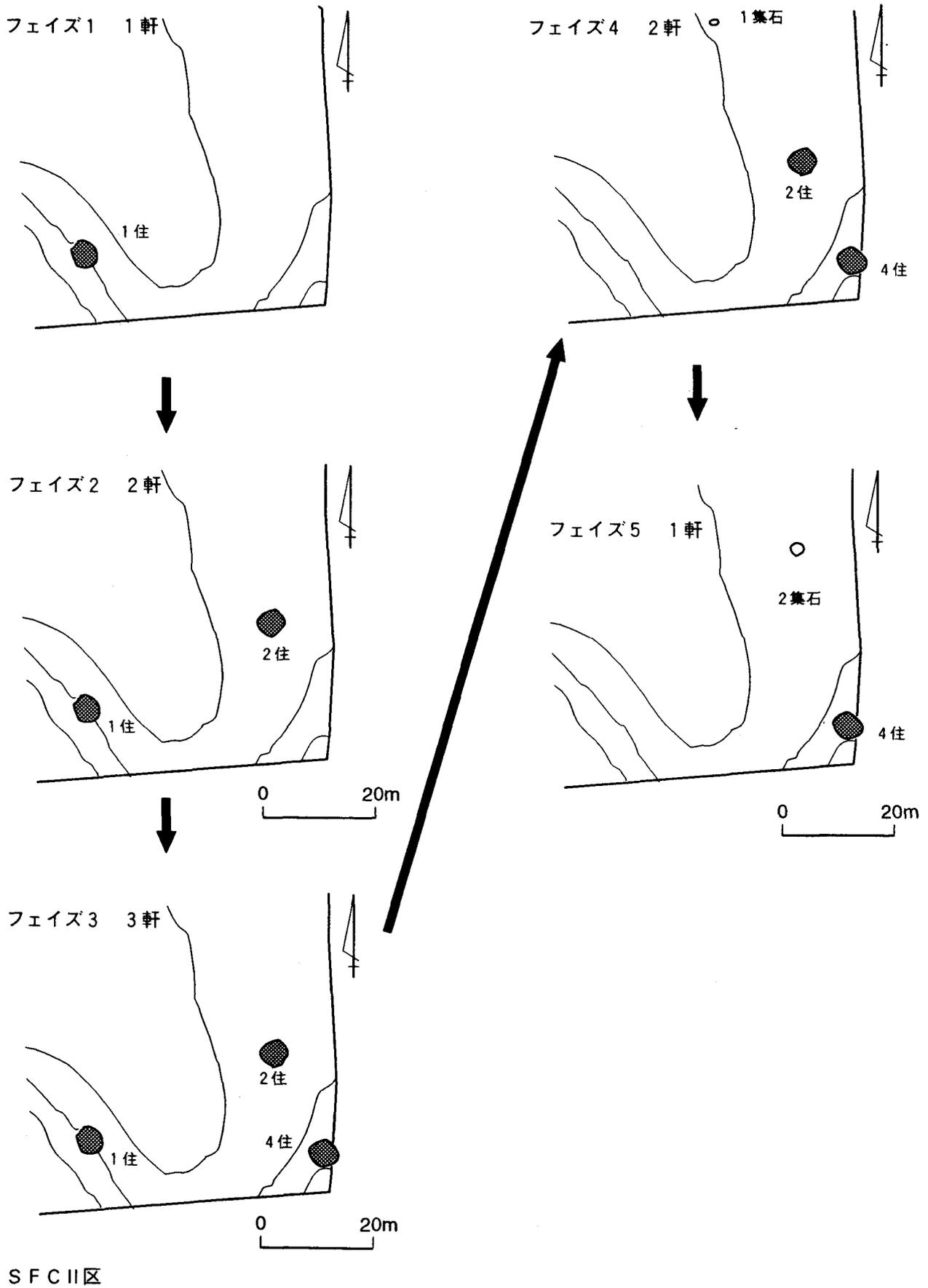


図8 SFC II区集落の変遷

### 3) 三矢田集落 (図9～11)

尾根先端部の丘頂部を巡るように、前期から中期の環状集落が形成されている。今回は、中期加曾利E式前葉期を中心とした住居6軒を扱う。土器細別時期で言うと、完全に新しい12号住居以外は、中期後半加曾利E1～2式の土器を炉体土器としているが、小林が旧稿で紹介した10号住居のように、埋甕炉の作り替えにおいて層位的な新旧関係と炉体土器の新旧関係が明らかに逆転している事例もあり、周辺に転がっている廃棄土器を転用して埋設土器にしていることが想定できる場合が示されている [小林 1997]。よって、一概に出土土器・埋設土器によって住居の時間的位置づけを決めかねるが、下記のように住居のライフサイクルと遺構間接合関係、重複関係を重ね合わせることによって、合理的な変遷観を得ることが可能となる。

1号住居、2号住居、9号住居の3軒は、炉体土器に用いるなど10a期の所産と考えられるが、2号住居では、改修された新床面上に1細別時期新しい10b期の土器が遺存しており、やや新しい段階まで機能していたと考えられる。よって、集落当初段階には1号住居と9号住居とが存在（フェイズ1）、ついでこれに2号住居が加わり3軒となり（フェイズ2）、うち住居の改修・改築が認められないシンプルな構造の1号住居が最初に廃絶された可能性が高く、2・9号住居2軒によるフェイズ3が想定できる。ついで10b期の土器を炉体とする10号住居が現れる（改修のある2・9号住居と同時機能すると考えられ3軒でフェイズ4とする）。この炉体土器は、胴下部を削りとして炉に埋設しているが、この胴下部の不要部分は、尾根の反対側斜面に位置する廃棄場より出土し、炉体に接合する。即ち、不要部を居住地近くから片づけ、きちんと廃棄処理を行っている。しかし、10号住居改修による炉体土器作り替えの際に破損した口縁部破片については、住居周辺（主として住居入口から等高線低位側の斜面に遺存）にばらまいたように遺存しており、きちんとした廃棄処理を行わずに済ませている。このうちの1片が前フェイズに同時機能していた9号住居の覆土上層に遺存している（図9）。よって、9号住居は10号住居改修時点において、埋設途上であったことがわかる。よって、前述のように10b期の完形土器を床面に遺存する2号住居新床面と10号住居改修面の2軒が同時機能するフェイズ5、さらに10号住居のみが機能しているフェイズ6が設定できる。最後に、これらの住居群と若干の時間的断絶後（土器細別時期にして2細別時期を間に挟む）に12号住居が1軒のみで設営される（フェイズ7）が、この12号住居は、9・10号住居跡窪地に土器などの廃棄を行っている他、12号住居床面出土土器の破片が2号住居跡窪地付近に分布していることから、12号住居機能時に、2・9・10号の各住居跡地は、廃棄場として利用できる形で、窪地として残っていたことが明らかである。

以上、3つの集落の細かな変遷を、それぞれまとめた。これによって、現段階において最も細かな土器編年作業の成果（新地平編年）を用いるよりも、さらに細かな時間的スパンでの集落の変遷を追うことができた。これら、南関東南多摩地域に存在する、中期中葉から後葉にかけての若干時期の異なる3つの小規模集落において、以下のような共通する状況が抽出できた。

- 1 集落の当初段階は1軒または2軒の住居で始まる。
- 2 同時機能住居は確認できた範囲で最大3軒である。機能する住居が1軒しかないフェイズが間に挟まれることもあり、1つのセツルメントにおける住居軒数は一定しない。むしろ増減をくり返すことが多い。

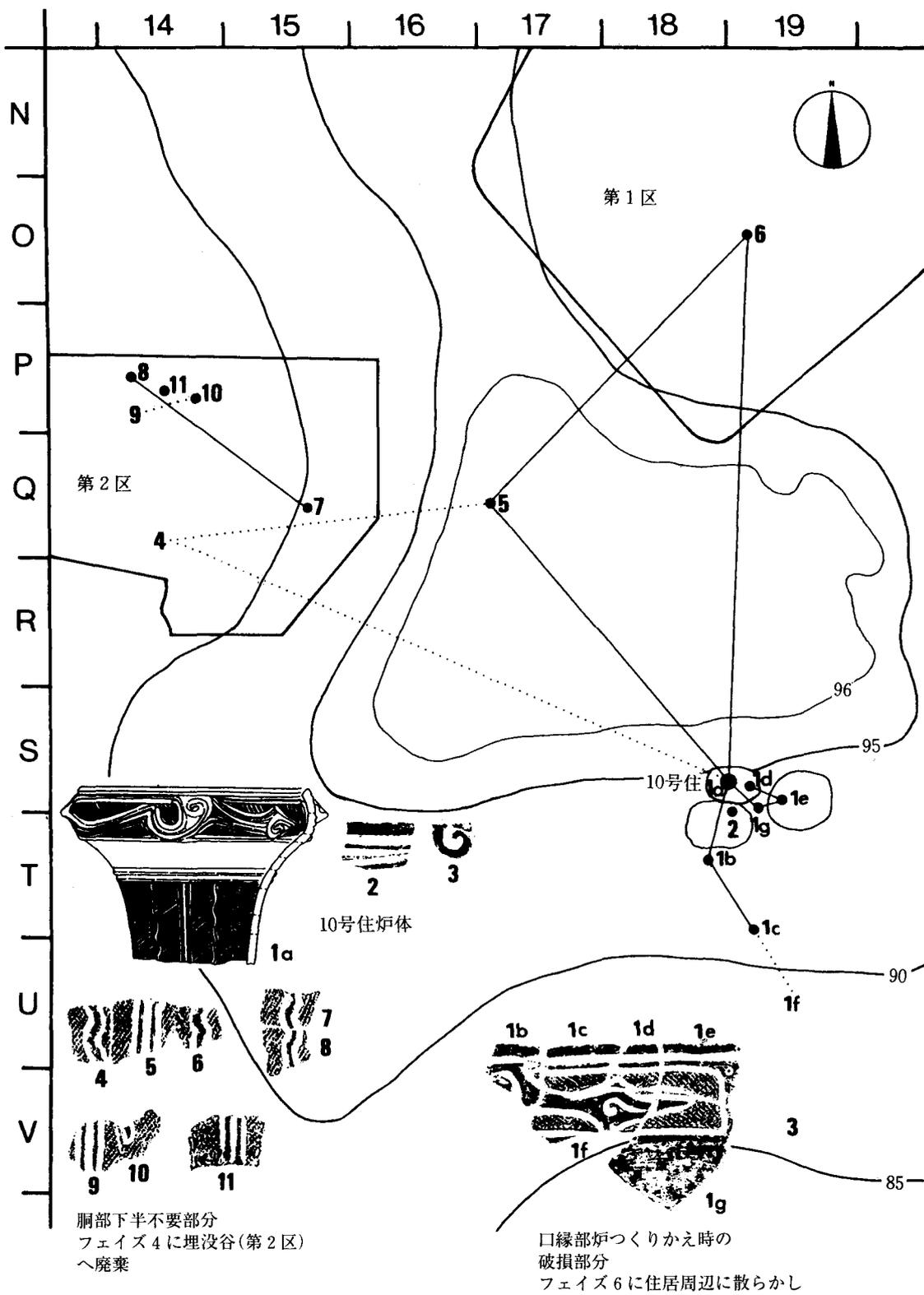


図9 三矢田集落フェイズ4・6(10号住炉体)土器接合関係図(1/500)

### 三矢田

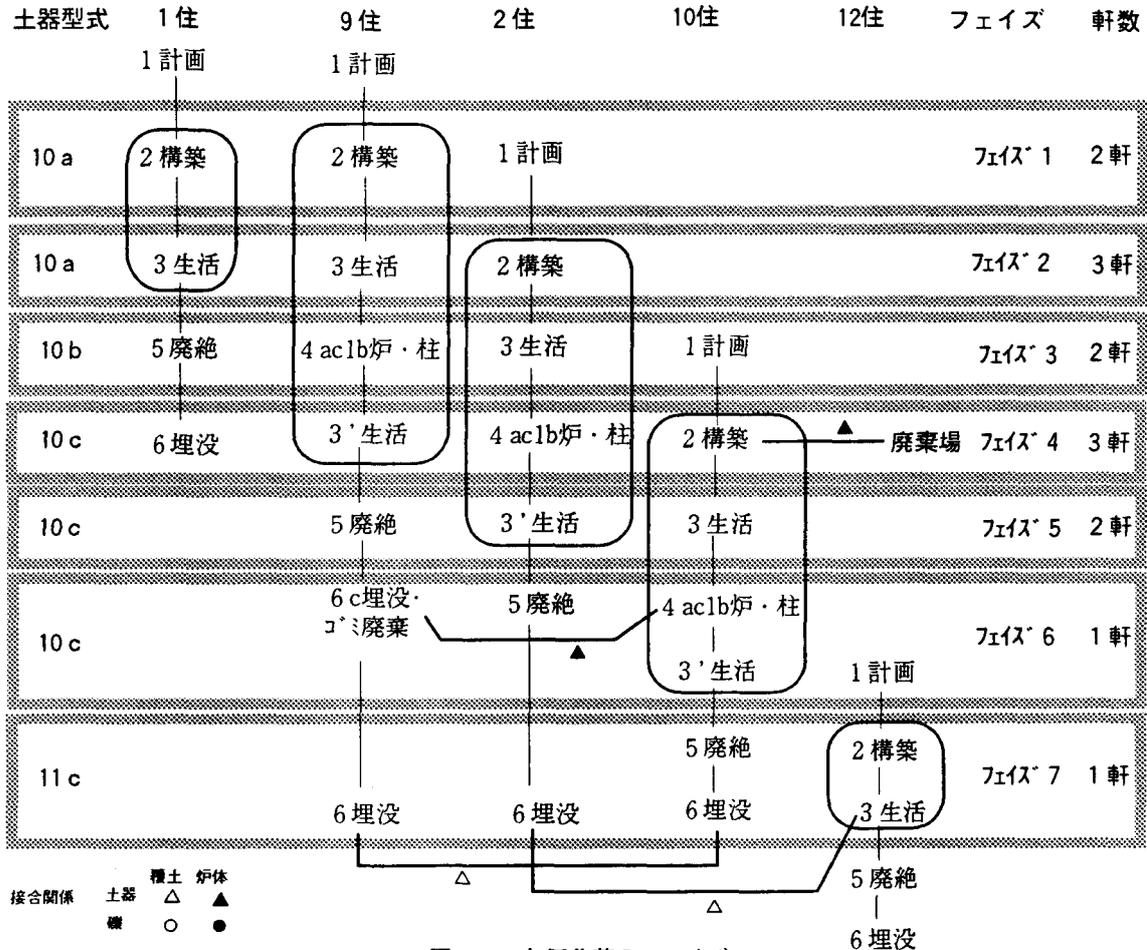


図10 三矢田集落のフェイズ

- 3 基本的には各住居の消長は、互いに重なりながら経緯しており、セツルメント内が無人化する期間は少ない（集落自体は継続する）と予想される。ただし、SFC I区集落や三矢田集落では、途中に断続する短い期間を挟んだ上で、同一セツルメントが利用されている状況が認められた。
- 4 住居は、概ね一定の距離をもって配置される。三矢田遺跡では丘頂部を巡るように環状配置をなすが、SFC I区・II区集落では、台地縁辺部に沿って直線状・弧線状に配置している。
- 5 SFC 遺跡 I区・II区集落では、各フェイズの居住者は、前段階に廃絶した住居の跡地である窪地を、「廃棄場」や「集石遺構（調理場）」として再利用する。一方、三矢田遺跡では、廃棄場を集落外縁部の埋没谷部に設けている他、「単純な廃棄行為」[小林 1993b] の場として、近隣の住居跡地を利用している。今回検討しなかったが、早川天神森遺跡、目黒区大橋遺跡などの大規模集落では、環状に分布する住居群に重なるように遺物集中域が認められる<sup>(4)</sup>。以上のような廃棄活動の差異が、何らかの適応形態の差異を表すのか、セツルメントシステムの差異によるものなのかを検討することは、今回できなかった。

次章では、今回の小規模集落例での復元をもとに、当該期のセツルメントシステムに対して、若干の考察を行う。

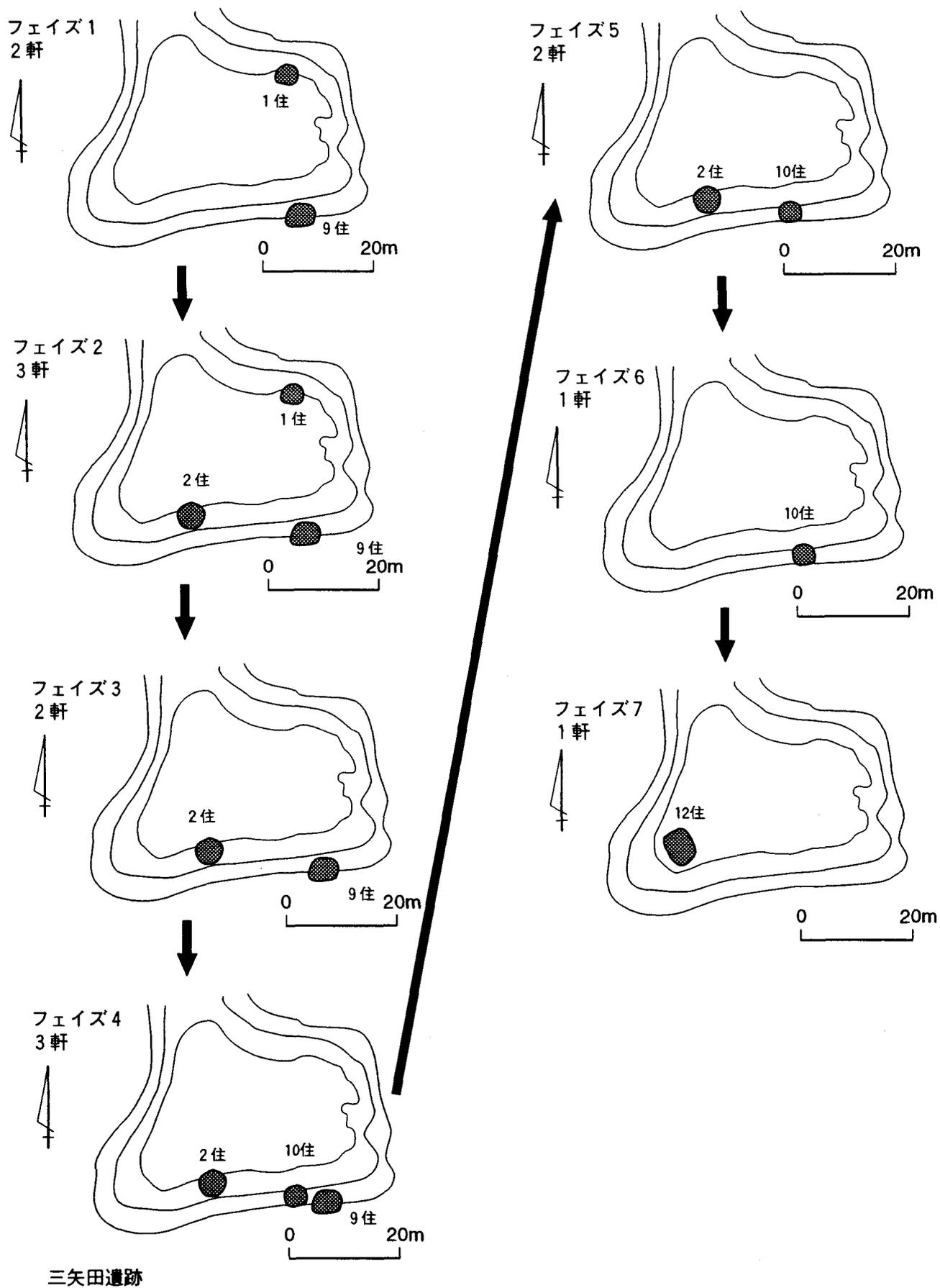


図11 三矢田集落の変遷

#### 4 考察—集落論の止揚へ向けて—

##### 1) 小規模集落における一時的集落景観とセツルメント・システム

今回扱った小規模集落の事例3集落の分析により、継続期間が土器細別時期2～3期で、同時点上屋施設が機能する住居が1～3軒を数える小規模集落が、南西関東縄紋時代中期の典型的な姿であることが予想される。さらに、今回分析を加えなかったが、目黒区大橋遺跡のような、比較してより長期にわたり存続し、同時機能住居が10軒以上は存在することが予想される大規模集落と、SFC I区C2集落のような、細別時期1期の期間のみ・単独1軒のキャンプサイト、住居の構築されない露营地・生業基地などの活動痕跡、土器・石器などが残されるのみの活動痕跡が、互いに関連しながら特定の活動領域内に分布していることが予想できるのである。以上のようなセツルメントシステムに関わる問題については、よりグローバルな視点が必要である。以前の筆者によるセツルメントシステムの分析〔小林 1988〕において、勝坂式・阿玉台式成立期の中期勝坂式土器分布圏と阿玉台式土器分布圏とでは、生業及びセツルメントシステムが異なっていることが指摘できている。即ち、大規模な地引き網漁と内湾性・内水性漁業を主要な生業基盤とする阿玉台式土器分布圏では、東関東地方に時期を経るに従って次第に住居数を増す拠点集落を維持しながら、東京湾西岸に単期的な生業基地を展開させていくのに対し、多摩地域の勝坂式土器分布圏では、居住地周辺の生業領域内での管理栽培を含むような植物質食料採集・内水性漁業・狩猟などをバランスよく行う多角的な生業戦略を行うため、個々の拠点集落の規模は基本的に変わらず、人工増加分を他の地点に分村していくことで、生業領域を広げていくのである。今回は、勝坂式最盛期から加曾利E式を扱っており、また異なったセツルメントシステムも予想できる。遺跡間の相互関係をも視野におさめた上で、検討を重ねていく必要がある。

##### 2) 集落の継続性、居住者の移動

基本的には、複数の住居で、住居のライフサイクルにおける分節間が少しずつ重なりながら連続していくような流れが認められる。1つの住居が構築され、使用され、改修されてさらに使用されていく間に、他の住居が構築されたり、廃絶されたりしていくのであり、その間には遺構としての機能に「だぶり」が生じていることが多い。こうしたことから、基本的には、集落内の居住施設の移り変わりは、断続的に住居が構築・廃絶を繰り返しているのではなく、古い住居が廃絶される前に新たな住居が構築されていく状況を想定することができる。そうした意味で、継続的な営みが行われていたと言い得るであろう。

今回検討した集落でのあり方を見ていくと、複数住居による同時機能住居の段階がある一方、途中で1軒のみが機能している段階が認められるのも興味深い。集落内の居住者は一定せず、頻繁に集落間で移動し、居住者が移動している可能性が高いのではないだろうか。

なお、前述のように多くのケースでは継続的であるのだが、SFC I区フェイズ2と3の間、及び三矢田遺跡フェイズ6と7の間の2時点では、断絶が認められた。前者では新フェイズの単独住居出土礫が、旧住居埋没後の覆土中などに広く分布することから、覆土上層まで埋没するだけの時間的経過が考え得る。同様に、後者では埋設土器の時期から見て1細別時期以上の時期差があり、その間の時期の土器出土もないことから、両フェイズの間にある程度の長さの時間的経過が考え得る。即ち、状況的に断続している可能性があるフェイズも存在する。こうした事例は、集落自体が

一旦断絶され、再び居住地（またはキャンプ地）に利用される状況もあり得ることを示している。

### 3) 住居跡配置の環状化形成

縄文集落の環状構成については、計画された住居群の配置なのか、結果的に環状を呈する配置となったと考えるのか、大きく2つの意見に分かれていた。集落の環状化のプロセスを動的に復元しようとする試みは、近年になってから行われるようになってきている。

例えば谷口康浩氏は、「環状集落形成論」[谷口 1998a]において、長期の居住と人口の集合が予定される居住地、即ち環状集落形成期に、柵田Ⅳ型（2軒1組が2単位）または三の丸C型（2軒）の構成が取られるとする。即ち、基本的にやや離れた位置にある2軒1組の単位が、集落形成当初に構成され、それが環状集落の基となると興味深い指摘を行った。しかし、その当初の4軒または2軒が同時期に居住されているとの根拠は明確ではない。この例での谷口の、同時に居住、または同時に構築されたと考える根拠については、土器型式と重複関係からの時期比定が主たる判断であるように思われる。「環状集落の分節構造の中に2大群の構造がある」というような、いわゆる「双分組織」のモデルを検討することが不必要とは思わないが、まずは、2軒1単位にこだわらない、実証的な開拓期の集落または単純時期の集落（小林のSO型集落）の住居数について検討を加えるべきではないか。さらに、時間的な枠組みをより細かくした上で、環状集落形成の過程を検討してみたいものである<sup>(5)</sup>。

前章で検討したように、典型的な小規模集落であると考えた慶応義塾湘南藤沢キャンパスの中期勝坂3式期の集落の場合、最小1軒、最大3軒の住居が同時に機能していることがわかった。これら2・3軒の住居は、空間的に見て直線的に配置されている。この配置は概ね舌状台地の等高線に沿っている。住居の配置のみを見た場合、決して環状集落の形をなしていない。しかし、住居の外側（住居の配置より斜面側）に巡る集石遺構の配置や、住居内側（台地の中側）に集中する土器や礫などの遺物集中部分は、明らかにドーナツ状の分布を呈している[小林 1993a]。短期的に見た場合、住居の配置は必ずしも環状に配されるのではなく、直線配置を基本とする可能性が高い。同時に、その居住者の生活は、住居の配置に必ずしも規制されず、環状を呈するように活動地点が分散しているのではないか。湘南藤沢キャンパス内遺跡の場合では調理分配活動は斜面際に近い地点で、風向きに応じて集石が構築されることにより、台地縁辺分を巡るようにその活動域が構成される。一方、土器・石器など道具の製作活動は、台地中央部を巡るような範囲で行われたと考えることができる。この際、中央部が遺物の希薄な地点になる理由は、湘南藤沢キャンパスでは状況を把握することができないが、加曾利E式期の集落においては、衆知のように、集落中央に土坑墓が集中することを勘案すれば、やはり中央部は祭祀・儀礼・葬送・埋葬の場として意識される、場合によってはモニュメントが存在する場であったことは十分想定可能である。

従って、世代間にまたがるような住居配置の規制の存在があったかどうかなどの、現時点における解決不能な課題はあるが、現象面に限ってみる場合、生産・消費の活動域が環状に展開されることによって、住居の配置も時期的な累積の結果、遺構配置が環状化することは間違いないといえる。少なくとも、たとえ1時点での同時機能住居が1～3軒程度であっても、前時期に廃絶された住居の位置、次時期に計画されている住居の位置は、当時の居住者に把握されている上、より古い時期の住居群も窪地として認識可能であり、時に廃棄場等として利用しているのであるから、それらと

---

の位置関係を一定にするという基準によって、環状の構成が取られたことは、十分想定可能な状況であろう。<sup>(6)</sup>

## 5 まとめと展望

本稿においては、以下の点を指摘した。

- 1 土器による細別時期設定は、大枠としての集落の時間的位置を示すことができるが、その時間幅は1世代以上の時間幅をもつと考えざるを得ない。重複関係等からみて、住居の建て替え・新築のサイクルは、土器型式変化のサイクルよりも短いことが多い。
- 2 集落内の遺構のライフサイクルを整理すると、土器から見て同一の細別時期に属する遺構群についても、明らかに時間差の存在する遺構が指摘でき、逆に1つの遺構においても改修・改築を重ねることにより、複数の細別時期にまたがる利用が指摘できる場合がある。
- 3 遺構間接合と遺構重複関係を、遺構のライフサイクルに重ねていくことによって、同時機能の遺構群を抽出することが可能であり、集落の一時的景観—同時機能の遺構群の組み合わせ—を積み重ねていくことによって、集落の細かな時間的動態を、フェイズとして区分することができる。
- 4 今回はケーススタディとして、いくつかの小規模集落の実態を明らかにしえた。その結果、集落の構成住居数は一定ではなく、かなり頻繁に住居数の増減があったと思われる。また、1から3細別時期の短期間の継続・同時に1～3軒が機能する小規模集落が、一時的に断続しながらも継続的に利用され続けていた状況が想定できた。

本稿では、遺構のライフサイクルを復元することによって集落での細かな時間的動態、特に同時機能の住居の把握を目指し、そのための分析方法を模索した。そのため、まずは検討が容易な、遺構数・継続時期の比較的少ない小規模集落を材料とした。その結果、土器型式時期よりも細かな時間幅で、直接重複関係のない遺構間についても、細かなフェイズとして、一時的景観の積み重ねの姿を復元し得る有効性が示せた。今後、目黒区大橋遺跡などのような大規模集落においても同様の分析を試みていきたい。別に、今回分析したような小規模集落と、1軒だけの住居が構築されるようなキャンプ地の比較を通して、例えば1～2軒だけで構成される単純な居住地において、生業基地等のキャンプ地としての性格のセツルメントと、継続集落の当初段階（開拓段階）の姿である場合とに差異があるかどうかについても探りたい。さらに、今回の分析ではあまり踏み込めなかった集落の各フェイズの時間（土器型式細別時期より短い時間幅である）、間に断絶がある場合のセツルメントの状態（居住地自体が全く利用されないのかどうか）、断絶がある場合のその期間（数週間、季節、数年などどのようなオーダーか）、同一の居住者が回帰することによって再利用されるのか否か、などの点についても検討を重ねていきたいと考える。

本稿を草するにあたり、慶応義塾大学民族学考古学研究室、同埋蔵文化財調査室、町田市真光寺広袴遺跡調査団、目黒区大橋遺跡調査会の関係者には、資料の収集や分析の上で多大なご協力を頂いた。また、大野尚子氏には図版作成において、大内千年・建石徹・合田恵美子各氏及び金沢大学考古学研究室には、文献収集などにおいて多くのご協力を賜った。特に記して謝意を表する次第である。

## 註

(1)——集落論の研究史としては、佐々木藤雄氏の一連の研究〔佐々木 1993・94・96〕、谷口康浩氏の手による整理〔谷口 1998b〕を参照されたい。

(2)——いわゆる「火災住居」には、不慮の失火や落雷等により焼け落ちた被災住居と、住居廃絶後の放置住居または廃材の片づけのための放火による火付け片づけ住居とが含まれると考える〔小林 1996b〕。両者の弁別は容易ではないため、住居覆土内に炭化材・焼土層を多量に含む住居については、その考古学的事象としての側面を捉えて「被熱住居跡」と記すことにする。

(3)——小林達雄氏により設定された「吹上パターン」は、遺構覆土の形成過程から土器製作の季節性を含む「縄文カレンダー」復元を目論む興味深い視点であったが、結果的にはその他の遺物遺存パターンが抽出できず、吹上パターンの名称は不相当である。また、土器以外の遺物も同様に多量に含まれていることから〔黒尾 1988b〕、「住居覆土中遺物一括遺存現象」と呼ぶのがよいと考える〔小林 1993b〕。

(4)——谷口康浩氏は、集落の重帯構造をなす要素の一つとして「廃棄帯」を考え、「遺物が継続的に集積される場所と定義すべき性質のもの」〔谷口 1998a〕としている。集落内に、ドーナツ状・帯状に遺物集中地帯が形成されることには筆者も注目したいところであるが、これらの性格については、意識的な集積や目的のある廃棄というよりも、生活痕跡としての散らかし〔小林 1993b〕での「結果としての廃棄」の結果ではないかと考える。

(5)——筆者の検討してきた南関東中期前半の集落では、当初段階は1軒から始まる場合が多いと考えている。ただし、この点については、時期・土器型式圏（考古学的地域文化）による差異も考慮する必要がある。例えば、旧稿〔小林 1988〕において、多摩地域の勝坂式成立期の集落は、人口増加に伴い、河川沿いに1軒程度の住居を分村のように新たに展開させ、その中から周辺領域の開発に適した地点を集落として発展させていくようなセツルメントシステムを有していることを示した。また、同一の勝坂式成立期土器分布圏のなかでも、八王子盆地

を中心とした小地域では拠点集落を維持しつつ活動拠点を周辺に配置していくコレクター型〔Binford 1980〕のセツルメントシステムを有するのに対し、現町田市付近の南多摩中央域では、短期的・小規模な拠点集落が点在し、フォーレジャー型〔Binford 1980〕に近いセツルメントシステムを有していることを指摘した〔小林 1994c〕。

(6)——本稿で検討しているSFC遺跡など小規模集落では、環状構成をとらず直線または弧状の配置をなす。居住期間の蓄積が少ないため環状とならないと考えるとしても、直線的な配置が、なぜ、結果的に環状になるかは興味深い問題である。

集落が設営される舌状台地などの地形的制約に伴い、環状の形を成す可能性もあるが、比較的広域な平坦面においても環状を呈することから、基本的には中心が定まっていたものと推測される。トーテムポールなどのようなモニュメントが存在したかどうかは不明だが、中心から同心円状に場（アクティビティ・エリア）を配置する規制が存在したことは間違いない。時間的に蓄積された遺構の配置が、結果的に環状をなすことの、具体的な契機として理由を仮定してみると、以下のような仮説が考えられる。

1 以前の活動に伴い不要物が散乱した地点（「散らかし」行為によるゴミ集積地）を避けた結果、遺構配置が環状となった。特に堅穴住居の場合、跡地を廃棄場等に再利用することがあったため、離れた地点を選んで居住施設の移設を繰り返した結果である。

2 季節的に風向きにより、居住施設の位置を移した。夏期と冬期とで、おおよそ反対の風向きとなる場合、季節の変わり目に離れた地点に住居の建て替えを行った。

3 各方向に住居を配することで、周辺生業域への注意（自然環境）や周辺の他の集落（社会的環境）を望見するといった周辺環境へのアクセスポイントとしていた。

本稿で検討したように、具体的に各住居間の関係を捉えていくことによって、集落の実態をより明らかにした上で、改めて検討を加えてきたい。

## 参考文献

- 安孫子昭二 1997 「縄文中期集落の景観—多摩ニュータウンNo446遺跡—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』XVI 21-58  
 石井 寛 1977 「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録』2 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1-42  
 関間俊明 1995 「堅穴住居の覆土形成に関する一考察（I）—焼失住居とされる目黒区大橋SJ91号住居跡例をもとに—」『東京考古』13 149-156

- 大野尚子 1996 「堅穴住居の覆土形成に関する考察(Ⅲ) 一目黒区大橋遺跡SJ47号住居跡の居住最終段階および改修について」『東京考古』14 47-58
- 加納 実 1988 「土器型式と集落」『研究連絡誌』23 1-9
- 桐生直彦 1989 「床面出土遺物の検討(Ⅰ) 東京都における縄文時代住居跡の事例分析を通じて」『物質文化』52号 39-59
- 黒尾和久 1988a 「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』454 9-21
- 黒尾和久 1988b 「堅穴住居出土遺物の一般的なあり方について—「吹上パターン」の資料的検討を中心に—」『古代集落の諸問題』17-36
- 黒尾和久 1995 「接合資料の検討から見た縄文中期の居住景観」『シンポジウム縄文中期集落研究の新天地(発表要旨・資料)』77-122
- 黒尾和久・小葉一夫・小林謙一・中山真治 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『住居跡分類コード』『シンポジウム縄文中期集落研究の新天地(発表要旨・資料)』縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会 1-24
- 合田恵美子 1997 「堅穴住居の覆土形成に関する一考察(Ⅳ)—覆土と周辺包含層の土器出土状況の比較から—」『東京考古』15 81-95
- 小杉 康 1985 「住居址に関する問題—住まいの一生—」『原町西貝塚発掘調査報告書』古河市史編さん委員会
- 小杉 康 1990 「住居址研究の指針—「住まいの一生」と遺跡化—」『藪塚遺跡台山地点』群馬県新田郡藪塚本町教育委員会
- 小林謙一 1983 「遺跡出土土器の量的把握に関する試論」『異貌』10号
- 小林謙一 1988 「縄文時代中期勝坂式・阿玉台式土器成立期におけるセツルメント・システムの分析—地域文化成立過程の考古学的研究(2)—」『神奈川考古』24号 81-109
- 小林謙一 1991 「縄文時代前期末葉から中期にかけての三矢田遺跡」『真光寺・広袴遺跡群Ⅵ』鶴川第二地区遺跡調査会 504-548
- 小林謙一 1993a 「縄文中期分析のための基礎データの整理」『慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡』1 総論 慶応義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室 757-801
- 小林謙一 1993b 「縄文遺跡における廃棄行為復元の試み—住居覆土中一括遺存遺物及び炉体土器の接合関係—」『異貌』13号 17-45
- 小林謙一 1993c 「多摩における勝坂式成立期の土器様相」『東京考古』11号 23-62
- 小林謙一 1994a 「出土土器量からみた縄文集落規模の比較のためのサイドノート」『異貌』14号 14-38
- 小林謙一 1994b 「堅穴住居の廃絶時の姿—SFC 遺跡・大橋遺跡の縄文中期の事例から—」『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』日本考古学協会 12-17
- 小林謙一 1994c 「縄文時代中期前葉の南多摩中部域」『東京考古』12号 1-36
- 小林謙一 1995 「住居跡のライフサイクルと一時的集落景観の復元」『シンポジウム縄文中期集落研究の新天地(発表要旨・資料)』123-164
- 小林謙一 1996a 「堅穴住居跡のライフサイクルの理解のために」『異貌』15号 29-42
- 小林謙一 1996b 「堅穴住居跡のライフサイクルからみた住居廃絶時の状況—南関東の縄文中期集落での遺物出土状態を中心に—」『すまいの考古学—住居の廃絶をめぐる—』山梨県考古学協会 1-16
- 小林謙一 1997a 「堅穴住居跡調査における一視点—集落論の前に住居調査論を—」『山梨県考古学協会誌』9 山梨県考古学協会 13-23
- 小林謙一 1997b 「遺構覆土堆積過程復元のための調査方法—遺跡調査における経験的な層位所見と思いこみ—」『民族考古別冊特集号ポストプロセス考古学の射程』43-56
- 小林達雄 1965 「住居址の埋没状態及びそれに派生する問題(住居廃絶処分の問題)」「遺物埋没状態及びそれに派生する問題(土器廃棄処分の問題)」『米島貝塚』庄和町教育委員会 12-15
- 佐々木藤雄 1993 「和島集落論と考古学の新しい流れ—漂流する縄文時代集落論—」『異貌』13号
- 佐々木藤雄 1994・96 「水野集落論と弥生時代集落論(上)(下)—浸食される縄文時代集落論—」『異貌』14・15号
- 末木 健 1990 「学会動向 遺構論」『縄文時代』1号 縄文時代研究会 209-212
- 鈴木素行 1996 「縄文時代の集落と貝塚の形成—木戸作遺跡における「環状集落」と「環状貝塚」の解体—」『季刊考古学』55 雄山閣 44-49
- 建石 徹 1995 「堅穴住居の覆土形成に関する一考察(Ⅱ) 一目黒区大橋SJ6号遺構の覆土上層を中心に—」『東京考古』13号 157-167
- 谷口康浩 1998a 「環状集落形成論—縄文時代中期集落の分析を中心として—」『古代文化』50巻4号 古代学協会 1-18
- 谷口康浩 1998b 「縄文時代集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』14号 43-88
- 塚田 光 1969 「下総考古学研究会の歩み」『考古学研究』16-2
- 土井義夫 1991 「1990年の縄文時代学会動向 集落・領域論」『縄文時代』2号 216-218
- 中山真治 1995 「縄文中期土器の時期細分と集落景観」『シンポジウム縄文中期集落研究の新天地(発表要旨・資料)』25-76
- 西秋良宏 1995 「廃棄行動に関する最近の考古学的研究」『東海大学校地内遺跡調査団報告』5 151-171

- 羽生淳子 1990 「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点」『物質文化』53 1-14  
 林 謙作 1994～1996 「縄文時代史 縄文人の集落」『季刊 考古学』第48～58号  
 水野正好 1969 「縄文時代集落復元への基礎的操作」『古代文化』21巻3・4号 1-21  
 武藤康弘 1995 「民族誌からみた縄文時代の堅穴住居」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集 267-301  
 三鍋秀典 1990 『吉峰遺跡—第7次発掘調査報告書』立山町教育委員会  
 両角まり 1994 「住居跡の表情—目黒区大橋遺跡SJ6号遺構の事例より—」『東京の遺跡』No. 43 1-3  
 安 英樹 1997a 『能登島町通ジゾハナ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 122頁  
 安 英樹 1997b 「遺跡・遺構への視点と問題点」『北陸古代土器研究』6  
 山本暉久 1978 「縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』3号 49-93  
 和島誠一・岡本勇 1958 「南堀貝塚と原始集落」『横浜市史』第1巻 横浜市 29-46  
 Binford, L. R. 1980 Willow smoke and dog's tails. *American Antiquity* 45-1  
 Schiffer, B. M. 1987 "Formation Processes of the Archaeological Record" 365p  
 Schiffer, B. M. 1988 "The structure of Archaeological theory" *American Antiquity* 53-3

発掘調査報告書

- 岡本孝之・鈴木次郎・小林謙一・桜井準也 1983 『早川天神森遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告書1 386頁  
 鶴川第二地区遺跡調査会 1990 『真光寺・広袴遺跡群VI三矢田遺跡—遺構編—』  
 鶴川第二地区遺跡調査会 1991 『真光寺・広袴遺跡群VI三矢田遺跡—遺物・考察編—』613頁  
 小林謙一・桜井準也・須田英一・大野尚子・岡本孝之ほか 1992 『慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡』3 縄文時代Ⅱ部 慶  
 応義塾藤沢校埋蔵文化財調査室  
 岡本孝之・小林謙一・桜井準也ほか 1993 『慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡』1 総論 慶応義塾藤沢校埋蔵文化財調査  
 室  
 吉田格・小林謙一・両角まり・大野尚子ほか 1998 『大橋遺跡』目黒区大橋遺跡調査会

付記

脱稿後の1998年10月24・25日に、シンポジウム縄文集落研究の新地平2が開催され、筆者も参加して多くの示唆と問題点の指摘を受けることができた。例えば、遺構間接合と同時存在住居の想定についての方法的擬義などが討論されたが、その具体的な解答の一つが、本稿においても示されていると考える。今後とも議論を進展させていきたい。

(金沢大学埋蔵文化財調査センター、国立歴史民俗博物館共同研究員)